

こんどうクリニック

今藤 誠俊

2026 年 3 月 14 日～15 日に台北市台大医院国際会議センターにて開催された第 18 回台北国際中医薬学術論壇(18th Taipei Traditional Chinese Medicine International Forum)に、台北市中医師公会との学術交流協定に基づき参加した。筆者にとっては 9 年ぶり、かつ自身の中医学クリニックを開業して初めての参加となった。今回は日本に加えて韓国、アメリカ、カナダ、シンガポール、マレーシアなどから参加していた。9 年前に参加した時は、マレーシア・シンガポールなどからの参加者を意識していなかったが、中医学の裾野の広さ、広がりを変えて感じることができた。

今年初めて「台日韓交流プログラム」が開催された。台湾・日本からは癌に対する中西医結合の症例が紹介された。特に清水先生からは 9 例もの中西医結合の症例を学ぶことができ、自身では数少ない経験しかない抗がん生薬の具体的な使用例を学ぶことができたのは非常によい経験となった。また、韓国からは「韓国以韓醫藥為核心的整合照護制度—超高齡社會的醫療保險創新模式與全球擴散策略(韓国における韓医学を核心とした統合ケア制度 — 超高齡社会に向けた医療保険の革新的モデルとそのグローバル拡散戦略)」についての発表があった。以前に台湾・韓国の医師から「通常は東洋医学の医師と西洋医学の医師は対立することが多い」と聞いていたので、どのように医師同士が強調するのかについて質問したところ、「地域ごとに多職種も含めて委員会を作り、そこで東洋医学の医師と西洋医学の医師も患者ケアについて議論する」との回答であった。予防(未病)については東洋医学が優れるところであるので、このような形で中医師が患者ケア計画に関われるのは非常によいことだなと感じることができた。また、この質問は総合診療医と中医師の「二刀流」である自身でなければできないことだな、と自分の役割を感じることもできた。

各種講演も積極的に聴講することができた。中医師公会という場の影響かもしれないが、全体講演で触れられていた AI の利用など壮大な話よりも、一例一例の症例を大切にしている印象を受けた。個人的には、がん、糖尿病に対する中医学的な治療が多かったように感じられた。糖尿病について、大陸の中医師が経方を用いて「消渴は太陽・陽明・太陰の合病である」という考え方で治療する症例もあり、「経方も広く用いられている」と本では読んでいた内容が実際に紹介されていて、見聞が広がる内容だった。全体公演での鍼灸の講演に関して、中国語だったこともあり十分に理解できたわけではないが、原穴についての説明などは 9 年前よりもはっきりと理解できた。こんどうクリニックを開業してから湯液・鍼灸をともに使用して治療してきたことを強く実感できた。

また、16日にはこれまた9年ぶりに迪化街に生薬問屋を見学に行き、多くの種類の生薬を購入した。この間で特に鍼灸を学び始めるにあたって「東洋医学は知識だけでなく感覚も大切である」と強く感じていたので、特に嗅覚で生薬を感じる事ができたことは非常によかった。

今回の台北国際中医薬学術論壇への参加を通じて、「総合診療医と中医師の二刀流として、体表観察を丁寧に行い、漢方と鍼灸を使用して、同じく二刀流を生業としたい学生・研修医のロールモデルになる」という目標に対して、「この方向性で間違いない、このまま進めばいい」という方向性を改めて強く感じる事ができた。このような貴重な機会をいただき、ご招待いただいた台北市中医師公会に、改めて深く感謝を申し上げたい。

第96回国医節・第18回台北国際中医薬学術フォーラムレポート

日本中医薬学会国際交流委員会、中国天龍クリニック
崔衣林

2026年3月14日、15日に第96回国医節、第18回台北国際中医薬学術フォーラムが台北にて開催された。フォーラムは参加費を支払い聴講できる国際フォーラムと、別途追加料金を支払い、より深い内容を聴講できる特別講演があり、国際フォーラムは64題、特別講演6題と非常に豊富な内容が準備された。

今回のフォーラム64題中、台湾29題、中国大陸8題、アメリカ8題、日本7題、シンガポール3題、カナダ2題、韓国2題、イギリス1題、マレーシア1題、キューバ1題、香港1題、スイス1題と、例年に比べより多くの国から専門家が集まり、国際的な交流となった。特にアメリカと日本からの発表が増えた。渡航の規制があり中国大陸からの発表は増えていない。湯液41題、鍼灸7題、湯液と鍼灸の併用3題、その他12題と湯液が多い傾向だ。例年同様、経方の人気があり、中国大陸の経方大家である北京中医薬大学の郝万山先生より「仲景経方の大柴胡湯の応用」、南京中医薬大学の黄煌先生より「黄芩の臨床応用」、広州中医薬大学の李賽美先生より「糖尿病肥満症に対する六経弁治」がそれぞれオンラインで発表され、台湾の陳旺全先生より「中医名方の臨床における高精度療法」、張閔運先生より「国医張歩桃による経方を用いた体重コントロール」、頼榮年先生より「国医張歩桃の婦人科処方における比較分析」、香港の吳濤先生より「中医古典方を用いた高血圧と精神疾患の治療」、キューバ経方古典学院の黄仁先生より「小柴胡湯と大柴胡湯の臨床応用」、日本の頼建守先生より「傷寒論三陽合病に対する治療の内傷病時の応用一柴胡剤と石膏製剤の効果」、王曉明先生より「中日経方臨床応用の比較研究」がそれぞれ現地にて発表された。

経方の人気に伴い、経方をよく用いる日本へ注目も集まっている。日本からは上記2名の先生の他に、清水雅行先生より「癌に対する中西医結合治療」、李宜融先生より「日本漢方一伝統と革新が織り交じる未来」、喻静先生より「日本漢方研究の最先端―臨床応用と安全性評価」、相澤玲子先生より「日本漢方の歯科治療領域における臨床症例報告」、孫基然先生より「陽明一本義とそれに関連する問題について」それぞれ発表された。清水先生が発表された台日韓の交流会は、今年が第一回の開催でとても有意義な交流となった。私も通訳を担当し、台湾―日本―韓国の架け橋となることができた。また、この交流会をきっかけに日本中医薬学会と韓国の繋がりも増え、4月に開催される世界最大の韓医展覧会の K-MEX にも招待された。

鍼灸においては、イギリスの王迎先生より「腹診鍼灸による臨床各科疾患での応用」、アメリカの呉奇先生より「移光定位鍼灸による癌から慢性病に変化への模索と実証」、陳徳成先生より「動筋鍼による疼痛疾患の治療の機序と手順」、路基雄先生より「アメリカでの中西医結合治療による不妊治療モデル―鍼灸と中薬の役割」、カナダの鍾政哲先生より「董氏奇穴の鍼と中薬の結合による太陰伏邪の自己免疫疾患に対する治療の経験と討論」、台湾の林昭庚先生より「鍼灸実証医学と治療の手引き」、黄建魁先生より「火鍼を用いた骨の見える四級褥瘡に対する治療法」、翁瑞文先生より「咳嗽に対する経方と董鍼」など、多くの分野における治療法が紹介された。日本の鍼灸に関する発表はない。

フォーラムは、湯液や鍼灸の両方を学ぶことができ、他では聞けない治療法も多く、世界各国の現状を知ることができる国際学会であった。また、台日韓交流会は日本中医薬学会が韓国との交流を深めるきっかけともなり、今後、国際交流委員会として韓国との交流を積極的に行う予定だ。